

# No. 1381

## 西域の暮らし

—シルクロード展—

名古屋市博物館で開かれているシルクロード展。この展示会には中国・オリエントなどシルクロードに関する出土品約150点が展示されている。中でも注目されるのが明器と呼ばれる陶器。これは中国の古代、唐の時代、人が死ぬと生前と同じ生活があつた世でもできるように遺族が生活用品を陶器のミニチュアにして墓に入れたもの。ラクダはシルクロードの船である。大きな荷をつんで長安の都にも現われたのだろう。シルクロードの長旅が目に見えるようです。家も家畜も農具も広大なコーラシア大陸で種々な民族が時間をかけて織り出した文化の跡である。豊かに表現された明器の数々。古代中国西域の2000年もの昔の暮らしをしる。のばせる。

## 山開き

千変万化、次々にその姿を変える富士山。「富士には月見草がよく似あう」とは大宰治のことば。美しい富士の山はまた信仰の山でもある。山梨県富士吉田市にある富士浅間神社。社記によれば垂仁天皇の時、富士山の大噴火のため不安にかられる住民を安んずるため、火山鎮護の神として木之花咲耶姫を祀ったのに始まると伝えられている。毎年、7月30日は富士山の山開き前夜祭。この日は氏子をはじめ白装束の富士講信者、山岳関係者が数多く集まり、富士登山の安全を祈願した神事が行われる。茅輪くぐりの儀は祝詞を上げる神主を先頭に文字どおり茅で作った輪を3回くぐる、これは身体を浄めると同時に厄よけになるという。本殿では玉串をささげ富士登山の安全を祈願した。この神社に古くから伝わる神楽舞は岩戸神楽とも呼ばれ、岩戸の前で神々が踊ったという故事を神楽に表現したもので、山を開くのちにちなんで舞納められる。このあと境内の吉田口登山道入口に立つ鳥居に張られたシメ縄を手力男命が天狗木ヅチでたち切り、登山道を切り開いた。ことしは60年一度の御縁年とあって富士講信者が一斉に山頂めざして登っていった。富士山の誕生年ともいえる御縁年に登ると33回登ったと同じ御利益があるという。富士山五合目、雲海はどこまでも続く。7月1日には五合目でも山開きの祭が行われた。富士を祀った二つのみこしが登り初め。山小屋をあとにした登山者たちは頂上一番のりを目ざして出発。午前4時30分雲間からご来光が浮び上ると思わずバンザイを繰り返していた。日本人の心のふるさととして愛され、また恐れられて来た富士山。千数百年経った今もその思いは脈々と続いているようだ。